

## W. フォークナー：「熊」の殺戮は何を意味するか

井 上 一 郎

### What does the killing of “The Bear” mean in W. Faulkner?

ICHIRO INOUE

(序)

一つの神格とも言うべき巨熊 **Old Ben** を追跡し、殺害せざるを得ないことに不可避免的な悲劇性を認めながらも、巨熊追跡の物語が付与されている寓意性を無視して、即決的にその悲劇性の根拠を荒野に対して加えられた文明の側からの凌辱という図式に置き換える批評方法に対して、本論文では、狩猟の物語にその十分な寓意性を回復させることを主眼にする。その為には、主人公 **Isaac McCaslin** (以後、略して **Ike** あるいはアイクと呼ぶことにする。) の自己省察力と自己認識の独自性を、第四章の伯父との対話に於いて一貫して辿らなければならない。アイクにとって重要な点は、サム・ファーザーズが司り、アイク自身は殆んど無意識的な、大人へ成長する為の儀式的行動の大部分とその最後に付加された最初の主体的行動(財産相続の拒否)ではなく、その無意識的行動を宗教的、歴史的意識の枠で再編成し(寓意化し)、農園財産の放棄を自己存在から導かれる必然性へと化し、自らの生をもってそれを証明する点にある。「生まれながらにして老人であった」と言われるアイクに於いて、農園財産の放棄を検討し直すことである。従って、巨熊追跡の寓意性は、あくまでアイクの視角からの寓意性であり、巨熊の象徴性、及び、追跡が行われる荒野の意味も同様の視角から解釈し直す必要がある。巨熊＝荒野の象徴、荒野＝エデンではなく、それ等の関係を成立させているアイクの独自の歴史、宗教意識を考察した後に、全体的な狩猟の物語の寓意性の本質が露わにされなければならない。更には、熊の殺害と同様に作品の重要な事件を構成している農園財産の放棄を、アイクにとって半分他律的に行われた狩猟の儀式から我々が帰納的に解釈するのではなく、狩猟の体験によって獲得されたアイクの自己認識が農園財産の放棄を語るのを忠実に聴かなければならない。

## (I) 「呪い」

『熊』に於けるアイザック・マッキャスリンの主人公としての存在の根拠と独自性は、彼個人あるいは南部白人種全体に対する「呪い」の本質の認識、及び狩猟の寓意的行為を通して「呪い」から「自由」への脱却、最後には、その「自由」の観念を用いて農園財産の放棄へと飛躍するその仕方に在る。そして、「彼を創りあげたと信じている人たち...を驚かせるばかりか、アイザック・マッキャスリン自身をも驚かせた」<sup>(4)</sup>と言われる農園財産の放棄の故に、彼アイクは、アブラハムの子イサク (Isaac) としての神話的背景を超越して、その独自性を完結する。本章では、McCasin 家の後裔としての自己存在に対する最初の認識（「呪い」）について考察する。

アイクの自己認識に対して、荒野での狩猟経験と共に不可分に関係しているのは、McCasin 家に伝わる土地台帳の瞥見である。それぞれ、何れも別個にアイクの自己認識に関わることはない。狩猟経験と土地台帳の瞥見が相関的に一つの要因を形成する。前者は善への志向であり、後者は悪の認知である。従って、これはアイクにとって相関的でもあり、逆説的でもある。次の H. H. ワゴナーの言葉はこの逆説を述べている。「我々は、逆説に気付く。つまり、祖先の悪（土地台帳）の為に浄化の儀式（狩猟経験）が必要であるが、その儀式そのものが悪を発見する為の必須の条件である。」<sup>(5)</sup>（カッコ内は筆者）そこで、考察は当然、この次元の高い悪（「呪い」）に対する認知に至る契機として、土地台帳の瞥見から進められるべきである。

アイクが土地台帳に見出したのは悪であり、特に祖父キャロザーズ・マッキャスリンの近親相姦行為は驚愕と絶望的である。何故なら、悪の結果は消滅することなく、テニーのジム、フォンシバ、ルーカス・ビーチャム全てが白人アイクの従兄弟として現に実在し、又、その子孫は永遠に存在を続けるであろうからである。しかし、台帳に見出しうる悪の実体、総体が祖父の近親相姦行為に在るという限りに於いて、アイクの探究は可視性の領域を越えることがなく、次元の高い（自己）認識への途は閉ざされる。探究が一族の歴史の範囲を越え、独自の意識が南部の歴史（時間、空間）を表象し直すにつれ、その悪は次元を変えてアイクの前に現われる。彼にとって、その悪は南部の時間と空間に対して遍在性を持つから、必然的に悪の本質に対する探究は南部の歴史の始源へと遡及する。歴史以前、つまり悪以前への探究は、彼を根源的自然（神の内在性）の領域へ移行せしめる。この意識操作が、毎年六月と十一月に巨熊オールド・ベン追跡の為に馬車に乗って農園から荒野へ参入するという実際の行為に基いていることは言を俟たないし、又、意識の母体となるこの行為そのものも能動的なものではなく、極めて受動的である、という点は既に述べた。

ここでアイクの悪に対する認識の深化を完全にするため、巨熊がその神秘的生命を誇り狩猟隊が駆けめぐる荒野の意味について述べておく。作品の舞台は荒野であり、又、農園である。南部文明から見れば、各々、非文明と文明を表わす。アイクの思惟(第四章)に於いては、神の内在性の視角から南部文明は旧約の歴史と対照を成すから、文明、非文明は、それぞれ歴史、

歴史以前を示す。つまり荒野とは、人間の文明の対象であり、それ自体としては神が創造し内在するところの歴史以前の存在で、所謂根源的自然である。そして、アイクが参入する荒野は南部の歴史と並存し、現に農園の彼方に実在する領域である。アイクが十才の時点で目撃し、参入する荒野は、「記憶を絶した太古の森林」<sup>(4)</sup>であるが故に南部の歴史・時間の支配から自由であり、その領域への空間的移動がとりも直さず南部の歴史以前への時間的移動、あるいは究極的に「自由」への観念的跳躍になるはずである。既述の様に、この「自由」は「呪い」からの「自由」であり、キリスト教世界に於ける歴史以前の状態、神話的な人間の生の状態を指す。

考察を元に戻すと、南部の歴史的悪とは、根源的自然からの内在神の排除（殺戮）の繰り返しによって蓄積された。つまり、それは南部文明の動力となった白人の創造的意志の対象である根源的自然（荒野）それ自体に内在し、反射的にその意志を判定する根拠を着実に喪失して行くことを意味する。そして、C・ブルックスの言う、「自然は人間の活動に必要な舞台であり、人間が自らが何たるかを証明する為の領域である。」<sup>(4)</sup>という自然観は、南部の自然が歴史の視角から表象し直されていない点を除けば正しい。従って、アイクが土地台帳に発見した祖父の近親相姦の悪は副次的なものとされ、代わりに、根源的自然を対象化した人間の主体的な創造性の在り方に悪の本質が求められるべきである。

既述の様に、根源的自然（荒野）は神の創造行為と普遍的内在性を意味し、南部文明の対象物であると同時に、その实在自体が不断に南部文明を映す倫理的鏡面でもある。文明人、歴史内の存在の故に、既に墮罪の内にあるアイクは、実は非文明の荒野を棲家とする巨熊オールド・ベンに神を透視しているはずである。そのオールド・ベンは、「この世のけものでさえもない、いわば、死滅した大昔から出現した不屈不撓の時代錯誤とも言うべきもの…古の野性の生活の一つまぼろし、一つの縮図、そして一つの神格」<sup>(6)</sup>とも言うべきものである。この描写を可能にしているものは、アイクの視点的位置である農園とそこから眺められる荒野との間の質的差異を作り出した南部歴史の時間的幅である。従って、既に述べたように、歴史的隔絶を荒野への空間的移動によって一気に観念的に飛び越してしまうアイクにとっては、オールド・ベンは「時代錯誤」でもなく、「まぼろし」でもなく、ましてや「一つの神格」でもない生きた内在神そのものであるはずである。

今なお荒野に於いて生き続け、南部文明からは繰り返し排除されて来た神も、アイクの視角からは南部の歴史を超越して生き続け、全てを予定し計画し尽すカルヴィニズムの「怒れる神」(“the exasperated Hand”)<sup>(6)</sup>である。それは、アイクの伝承したオールド・ベンの老齢さと時おり示す恣意的暴力に表出されている。そして、又、南部カルヴィニズムの神は、南部の歴史をあらゆる意味に於いて先行する意図である。従って、アメリカ移民、建国という歴史的事実もヨーロッパ・キリスト教世界創造の一つのヴァリエーションとして原罪以前に位置し、「神さまが、たった一つの卵を使って、一つの国家がお互い同士の謙譲と憐みと寛容と誇りのなかに建設されるような新しい世界を、その人間たちに見つけだしておやりになった」<sup>(7)</sup>ということになる。又、新しい神の国建設という理念に保証された白人種の選民的矜持さえも潰え去

る。何故ならば、この理念の放棄、つまり歴史的に生産された南部の悪さをも、人間に対する神の絶望的見解として既に予定されていたからである。従って、移民に続く墮罪の歴史も、歴史を超越した必然的意図が成した「正義以上のこと、復讐以上のことだったのかもしれない。」<sup>(6)</sup> 土地台帳の瞥見と荒野の体験認識を根拠として、南部の歴史を予定し裁断する意志を持った倫理的超越者を想定した事、これがアイクという人物の独自性を成す部分である。これに対して、南部文明を正当化する立場から絶対者を否定する伯父マッキャスリンが対蹠的位置に存在する。

『だから、おれはこう言いたいんだよ——つまり、それにもかかわらず、それでもやっぱり、キャロザーズじいさんはそれを所有していたんだとな... 一方、神さまは——この裁決者、この建築家、この審判者——大目に見なすった——いや、大目に見なすったのかな？見おろしてごらんになった——いや、ほんとにご覧になったのかな？いや、少なくとも何もなさらなかったんだ——ご覧になって、しかも見る事がおできにならなかった、いや、見ることをなさらなかったんだ、ご覧になって、しかも見ようと、おそらく神さまは見ようとなさらなかったんだ——つむじ曲がり、無力で、盲目な神さまでな、そのどちらかな？』<sup>(9)</sup>

伯父マッキャスリンの想定する盲目、沈黙、無力の神に対して、アイクの神は「『無力ではなく、大目に見るわけでもなく、盲目でもない、なぜなら、神さまはそれを命じ、それを見まわっていないすった』」<sup>(10)</sup> ところの歴史を支配する絶対的意志である。

さて、可視的な近親相姦の悪を契機とした、より不可視な「呪い」に対するアイクの認識は、以上の如き荒野と南部歴史に対する独自の視角から成される。悪から「呪い」への質的変化を担うものは、倫理的絶対者の実在性に対する確信とその永続性に対する認知にある。既に述べた様にそれは、創造し全てを予定し尽すカルヴィニズムの神を中心にする旧約の世界を象ったアイクの歴史観によって証明される。「呪い」の根源は原罪に在り、原罪とは「知恵の木」の実を食う事、つまり、人間が自らの文明と歴史を創造する主体性を獲得する事である。しかし、アイク＝フォークナーにあっては、原罪は厳密に「知恵の木」の実を食する事、主体性の獲得には求められず、むしろ、その主体性の在り方が中心になる。従って、二十世紀文明を否定する意味での人間の原罪観は主題とならず、文明の始源に遡った人間の生の在り方が常に問題にされる。そして、フォークナーはノーベル賞受賞演説で述べている、「作家の特権は、『勇氣』、『誇り』、『憐憫』、『犠牲』...を想起させることによって、人間が『忍耐』するのを助けることである。」と。アイク＝フォークナーの神は、人間の生の在り方として「無記名」の大地の上での人種同朋主義と「憐憫」、「謙譲」、「寛容」、「忍耐」...を人間との間に契約した。そして、この契約の破棄が原罪であり、「呪い」の根源である。南部・旧約の世界のアダムであるキャロザーズ・マッキャスリンは、本来「無記名」の大地に「記名」化（土地所有）を宣

言し、本来、同朋の黒人種を隷従せしめることによって、白人の歴史、文明の始祖となった。従って、文明が存続する限り、「呪い」も存続する。南部・旧約の文明は常に神、及び神の創造（根源的自然、荒野）に関わって来たから、「呪い」は継承され、その現実態としての悪は歴史的に生産され続ける。「記名」化され、「神から奪いとられた」<sup>104</sup>自然は、「心無き事と知りながら」<sup>105</sup> イッケモテュッベ、トマス・サトペン、ド・スペイン少佐へと受け継がれたからである。そして、巨熊オールド・ベンの追跡に虚構化された荒野での儀式は、この破棄された契約、墮罪以前への寓意的志向として定位せられるが、ここでは、巨熊追跡の物語が一つの歴史的、寓意的事件として解釈し直されることを示唆して置くに留める。

文明人、歴史的存在としてのアイクの、自己存在を通しての「呪い」の認識は、更に、南部に於ける悪の実体が自己に及ぼす宿命的な呪縛力が意識されて完全になる。過去の悪の実在性は、アイクの従兄弟として存在を主張するテニーのジム、フォンシバ、ルーカス・ピーチャム達、混血児によって現在意識され、又、将来も白人の良心を刺激するであろう。そして、伯父アモーディアスが生涯独身であった為、アイク（イサク）は高齢の父セオフィラス（アブラハム）の子として、農園財産の相続は不可避である。南部の人間の契約を無視した創造的意志によって再生産されてきた自然、つまり農園こそ悪の実体であるから、従って神の「呪い」の必然的な相続は、怒り深い旧約の神に対する 燔祭に捧げられる人身御供 イサクの宿命に相似する。文明人、歴史的存在としてのアイクの農園（「呪い」）の相続は、に悲痛な自己認識をもたらす。「『おいら達の方は一度も自由になったためしなかった。』」<sup>106</sup>

## II 「自由」

少年アイザックの自己認識の第一は「呪い」であり、第二はその「呪い」からの「自由」である。そしてこの二つの自己認識は、それぞれアイザック（Isaac）をアブラハムの子イサク（Isaac）に、さらにイサクをして旧約的世界の神の宿命的呪いから解放たれた新しい型の人間へと変貌せしめる。

既述のように第一の自己認識は自らの生を貫く宿命的必然性への認識であった。何故なら、老サロザーズ・マッキヤスリンの唯一の末裔として「悪」の資質を内蔵し、成年に達したアイクにとって「悪」の実体（農園）の相続は殆ど不可避であるからである。しかし同時に彼は「善」の資質を内蔵し、「善」の実質行為の可能性をも継承している。

『熊』に於いて「悪」が歴史的に生産、増幅されたものである以上、「善」とは南部の歴史以前に存在する一つの状態である。それを領域として捉えると、人間の歴史（創造的意志）がそれ自身の為に対象化する以前の根源的自然、つまり神の完璧な意味での内在性ということになる。つまり、アイクは鋤と斧に象徴される人間の創造的意志（＝歴史）以前の根源的自然（荒野）及びそれに内在する神（巨熊）を継承しているのである。本来、その間には回復することの不可能な時間的経過を介在せしめているが、作品では根源的自然（荒野）は歴史（農園）

に対して空間的距離をおいて実在し、又、荒野に入る以前のアイクは神の内在性（巨熊）を超感的に所有しているのである。

その時、彼はもう、それまでその姿を一度も見ることがなかったにもかゝらず、罌のために片足に傷を負っているあの年をへた大熊…あたかも少年は、彼の五感と知性がまだ抱きとっていないものをすでに見ぬいていたかのようなようだった<sup>64)</sup>

荒野が歴史以前の状態とするなら、又、それが数百年に亘り南部文明と並存を続けた故に、その内在化、神格化（巨熊）は、「死滅した大昔から出現した不屈不撓の時代錯誤とも言うべきもの」<sup>65)</sup>である。荒野が、そして巨熊が文明に対して並存し続けたという事実、あるいはアイクの十才から十六才に亘るところの、その事実の体験認識がアイクをして、歴史を貫く神の絶対的存在に対する信仰を回復せしめたのであり、一方、アイクの対蹠的地点に立つ伯父マッキヤスリンにとっては、荒野も巨熊も神も文明の制御し難い動力の前には「時代錯誤」として葬り去られねばならないものである。

アイクにとって農園生活から荒野への参入という空間的移動は時間的移動（歴史的遡及）と等しかった。それは荒野という空間的存在が、農園が蓄積した歴史的時間以前存在であるというアイクの意識操作の所産である。従って、農園と荒野の境界を馬車で通過する行為は、成人以前のアイクにとって、歴史時間の遡及、「悪」以前の状態に対する無意識的選択を意味する。ここで無意識的というのは、成人以前、つまり財産相続権の獲得以前のアイクには歴史的存在としての意識はなく、従って根源的「善」と歴史的「悪」の間の価値判断は不可能であり、又、実際、アイクが荒野に入ったのは狩猟が目的であったのである。しかしアイクに於ける「善」の資質は、荒野の象徴オールド・ベン像の継承の超感覚性と、彼が後で見せる森の住人としての成長ぶりによって確められる。

アイクの空間的移動が時間的移動（遡及）に意識に於いて変質されたとしても、当然のことながらその本質的移動、つまり歴史的「悪」から根源的「善」への変貌をアイクが達成できるわけではない。換言すれば、荒野に入って習慣的狩猟を行う事自体によって「呪い」（墮罪）から「自由」（墮罪以前）の状態へ復帰できるわけではない。アイクの参入した荒野は、人間の生の一状態（condition）であり、歴史の始源に位置する神話的な世界（エデン）でもある。この生の理想形態が物語『熊』が全体構造として持っている狩猟の比喻で語られると次のようになる。

白人でも、黒人でも、赤色インディアンでもないただの男たち、忍耐する意志と剛毅さをもち、生きながらえる謙譲さと術をもった獵師たちについての話、そしてその話に並べて浮き彫りされる犬や熊や鹿の話…<sup>66)</sup>

因みにこの文章をアイクが語る神と人間との「契約」の件（次に引用）と比較すれば、巨熊オールド・ベンを追跡するこの作品が単に狩猟の物語ではなく、むしろ神の創造に始まる旧約的世界の時間の流れの中の一つの出来事を象徴している比喩的作品であることが証明されるはずである。

その大地を、同朋というだれの名前も特別についていない共同の状態で、損われない、お互いのものとして保っていくようにというわけだったんだ、そして神さまが要求なすった報酬は、ただ、憐みと謙譲と寛容と忍耐と…<sup>(67)</sup>

さて、前者の狩猟の話をアイクは狩猟隊の大人達から聞かされた、とあるから、伯父マッキヤスリンを始めド・スペイン少佐、コンプソン将軍等は、実際にエデンに住み「契約」に基いて生活したわけである。しかし彼等は、コンプソン将軍の言う如く、結局はエデンの真の住人たりえなかったのである。

一方、サム・ファザーズがアイクを今度は意識的にエデンの真の住人たらしめる。サムは「昔の…自由な祖先」〔傍点筆者〕<sup>(68)</sup>の後裔として、アイクが真の森の住人となる儀式を司る司祭の資格を持っている。サムは完璧な荒野の住人で、彼は荒野の主であるオールド・ベンの不可視な存在を殆んど嗅覚によって感取できる。

He could hear Sam breathing at his shoulder. He saw the arched curve of the old man's inhaling nostrils.

'It's old Ben!' he cried, whispering.

Sam didn't move save for the slow gradual turning of his head as the voices faded on and the faint steady rapid arch and collapse of his nostrils. 'Hah,' he said. 'Not even running walking.'<sup>(69)</sup>

アイクの究極的な自己認識である思弁上の「自由」（何故なら、すでに行為は少くともアイクにとっては無意識的に行われてしまったからである）は根源的自然（荒野）に対する神の内在性の認知、つまり契約の再認識と履行、言い換えれば荒野の真の住人に成ることによって達成される。勿論、それは作品中では、歴史的繰り返しとしての巨熊（神）の殺戮を究極的・必然的帰結とした一連の狩猟行為の中で行われる。先述の如く歴史時間を一挙に遡行した根源的自然の領域に於いては、白人種の歴史時間に最も関与度の少いサムが指導者である。その領域は、サムに導かれ神に対する信仰を復活させんと巨熊の周囲に集合した人格的無記名の信徒達の世界である。人格的無記名性とは、黒人種に対する同朋愛の破約以前の状態である。

さて、アイクを含むコンプソン将軍を中心とした南部白人達の信仰回復の儀式は、彼の歴史のアレゴリーに於いて南部・旧約の歴史の一事件として把握されなければならない、というの

が本論文の根本命題であった。既に述べたように、南部・旧約の歴史は「創造」（民族移民）と「原罪」（土地所有）及び「洪水」（南北戦争）等の事件によって構成されている。しかし、南部にとって「創造」も「原罪」も重要な意味を持たない。

『白人がだれも所有しないうちから、もうその土地が、じいさまやじいさまの種族である先祖がこの新しい土地に持ちこんできたものによって汚されているのを（神は）見ていないすったんだ』<sup>90</sup>〔カッコ内は筆者〕

アイクの思惟の対象は、歴史的に生産、増幅された悪とそれを常に裁く意志を持った神の内在性との関係である。裁断の意志と同時に人間を周囲に跪拝せしめ信仰（「契約」）を自らに収束せしめんとする神である。従って、「創造」に際して「希望もお持ちにならなければ、誇りも悲しみもお持ちになれなかった」神であるが「ただ待っていられたただけなんだ、ご自分で彼等をお創りになったんだから」<sup>91</sup>ということになる。そして、神は南部農園制度のソドムを眼前にして審判官としてこれを裁き、その恣意的破壊力によって人間に信仰を迫る。南部はこの力の前に南北戦争に敗北した。

『そこで神さまはもう一度この土地に眼をお向けになった。この土地のために実にたくさんおつくしになったからこそ神さまは今なおそれをお救いになるつもりでいなすった...そこで神さまはおっしゃった、それもけっして悲しんでおっしゃったのではない。彼等をお創りになり、したがって悲しみも、誇りや希望同様ご存じあるはずもない神さまがおっしゃったのだ——どうやらこの者たちは、苦しみにによってでなければ何事も学べず血で下線を施さなければ何事も覚えておられぬようじゃ——』<sup>92</sup>

敗戦を犠牲に回復した信仰は、僅に「『土地への愛と勇気』」<sup>93</sup>である。（「『ふむ、あるいはそれが神さまのお望みになったことかもしれんて、少なくとも、神さまがお手に入れたことではある。』」<sup>94</sup>）そして敗戦によって喪失したものは、旧来の貴族主義的な階級制度であり、南部白人の農園主たちは、貴族主義的階級制の形骸に固執しつつ、信仰を求めて荒野に入ったのである。ここに於いて『熊』の主要なアクションの部分（Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅴ章）を成す狩猟の物語が単に熊の追跡劇に終らず神の支配する歴史の中での重大な事件としてアレゴリカルな意味の枠を提供する。そして、その中で神の歴史を真に成就するものとしてアイクは、自分の財産相続拒否という行為を正当化するのである。巨熊の追跡に出發する白人の大人達は、自分達を敗北へと押し流した南北戦争の神的意図をここに再び成就するために一応懐旧的雰囲気をもそのまま纏っている。

というわけで、この朝みんなが森に入りこんでいったときには、ド・スペイン少佐は、そ



のうちの何人かが武装していないことを除けば、六四年と六五年のあの最後の陰鬱な時期に少佐が率いた若干の兵隊たちとほとんど同じように屈強な一団を率いてゆくことになったのである。<sup>89</sup>

さてアイクは、喪失していた信仰を回復すべく南北戦争を契機に起ち上った大人の信徒達への「新参者」(novitiate)であった。彼は司祭サム・ファーザーズの導きで根源的自然(内在神)の恣意性の下で「謙譲」、「忍耐」、「勇氣」…を回復する。アイクの真の信者としての素質は、歴史的悪と根源的無垢に於ける同時的存在の仕方を放棄する点にある。彼は歴史的悪(時計、磁石、鉄砲)の方を棄てる。信徒達の中で生命を賭して根源的無垢を選び取る彼のみが神(熊)に直接遭遇し跪拝を許される。しかし、一方、歴史的悪と根源的無垢の二律背反性を保持し続ける限り、大人達の究極の目的は神(熊)の殺戮、契約の破棄である。何故なら彼等は契約の実践を望む信徒でありながらそれと同時に獵師であるからである。即ち、二律背反的存在を続ける限り彼等は、歴史的悪を再生産していく。この区別が重要な意味を持つ。「アイクを含めた獵師達全体が巨熊の殺戮を犠牲にして、無垢の状態への復帰の為の一つの儀式を行っている。」という従来の見方ではなく、既に述べた様に、アイクと伯父マッキヤスリン等大人達の間には、その行動に於いて、質的な差異があって、それがアイクの財産相続の拒否に繋っている。一方アイクの目的は、歴史的悪(時計、磁石、鉄砲)を棄てた時点で、巨熊の殺戮ではなく根源的無垢性の化神としてのその永続である。従って、サムが、ライオンの飼育を始めた時、「彼はライオンを憎み、恐れていなければいけなかった。」<sup>90</sup>のであり、フェイス事件に於いては、実際、巨熊殺戮の唯一の絶対の機会を棄てているのである。彼は、このフェイス事件を通して最終的に「謙譲」と「誇り」を獲得した。このようにアイクの信徒としての成長が現実的物語(彼が参加している信徒集団の究極的目標は熊の殺戮であるが)の究極に於いて、殺戮の拒否に至るという事実が注目し値する。熊を狩る獵師という宗教的、歴史的的存在を放棄したアイクにとって究極的信仰への到達は熊の殺戮に帰着しないことをこの事実が示唆している。狩猟の物語と対照を成して来た旧約(南部)の歴史的一事件としての寓喩的物語は、アイクの深信と同時に、狩猟のリアリズムの世界を脱落せしめるのである。

歴史的悪(時計、磁石、鉄砲)を放棄し、「契約」の階<sup>まがはし</sup>(「謙譲」、「勇氣」、「寛容」、「忍耐」、「憐憫」)を登り詰めて、根源的自然(無垢)の化神の慈悲深い相貌を確信したアイクは歴史的悪の呪縛力(神殺戮の繰返し)から永遠に逃れる。オールド・ベンを殺すのはブーンである。従って、自分は「呪い」から「自由」である、とアイクは考えるのである。

### III 「放棄」

第四章の、というより作品全体のテーマは、成年に達したアイザックが、当然自分のものとなるはずの農園財産を「放棄する」(relinquish)という点に集中している。そして、この農園

財産の「放棄」という問題をめぐって、アイクがそれに帰着した自己釈明を行い、それを正当化する形で歴史に対する独自の省察を開陳し、一方、マッキヤスリン家の傍系の出身である伯父マッキヤスリン・エドモンズがそれに対して批判を加えながら対話を進める。先述の歴史的省察を土台にした熊狩りの神話的解釈の内容を省略するとアイザックの釈明の概略は、自らの存在に対する「呪い」の認識、及び、その「呪い」からの「自由」に対する新しい認識、この二つの自己認識から当然予想される農園財産の「放棄」ということになる。この概略は、あくまでアイザックの神話的思考の内容を全く捨象したものであるが、二つの自己認識を経過した後での農園、土地の「放棄」の当然性、必然性には、前もって述べればアイク独特の神話思考の中核を占めている根源的自然の無記名性（“the earth mutual and intact in the communal anonymity of brotherhood”）が大きな役割を果している。

アイクの自己認識「自由」—— ‘I am free.’<sup>99</sup>あるいは、‘Yes Sam Fathers set me free.’<sup>100</sup>——は、自らの南部に於ける存在として不可避的な「呪い」に対する認識に出発している。前者の概念は、後者の概念が相続されるべき一つの農園財産として実体化され眼前に提示された時点で、荒野での実際的な体験を基にして帰納され、又、確認される。「呪い」は成人以前のアイクには彼の存在を通して把握されるものではなく、その意味では、狩猟の物語がアイクにとって創造と黙示録的世界とを線で結ぶ南部・旧約の歴史の中の一事件としてその寓意性を發揮とはない。それが第四章の劈頭の言葉、「やがて、彼は二十一才になった。」<sup>101</sup>が示唆する内容である。

さて、アイクが自己の存在を立証する「自由」の概念とマッキヤスリン家が所有して来た土地を「放棄」するという行為の間には、アイクの釈明に於いて如何なる関係が成立するのであろうか。第四章の対話は、事実上伯父マッキヤスリンにとって驚嘆の念を感じさせるアイクの「放棄」宣言に始まり、「そうだ。サム・ファザーズがおいらを自由にしてくれたんだ」という彼の言葉に終わっている。従って、この両者の概念と行為の間には、対話全体の脈絡を通して、アイクの論理が貫流しているはずである。

「自由」とはこの場合、「呪い」からの「自由」である。六年間に亘る荒野での狩猟体験とオールド・ベンの追跡以前は、「おいらたちのほうは一度も自由になったためしはなかったのだ」であり荒野での生活を終えて成年に達した今は、「サム・ファザーズがおいらを自由にしてくれたんだ」ということを自覚する。さて、その「呪い」とは、既述の如く相続されるべき農園財産の形をとってアイクを襲うが、神話の世界では神と人間の間で大地に関して交わされた契約を人間が一方的に破棄して以来、人間の側に継続されたものである。アダムの南部的異形キャロザーズ・マッキヤスリンの墮罪以後、人間は神の軛を離れて、自らの主体性と創造性を信頼して南部の大地の上に文明を建設して行くが、神の根源的呪いは後代において、社会、文明の内部で現実態（農園・奴隷制度）として顕在化するか、もしくは、それを現実として鋭敏に把握する感受性をもった個意識（アイザック）を選び出す。その時、その個意識は独自の宗教的感受性をもって自らの非「自由」を意識し、神の契約に対する復帰を（「自由」）

を祈願する。John W. Hunt が作品のアレゴリカルな解釈要請の脈絡に於いて指摘する「自由」, 非「自由」の概念も大体同様である。

Having lost his freedom by his sin, man now suffers alienation from the natural and psychic resources inherent in God's creation which can restore him to freedom if he will appropriate them with *his heart*. [イタリックスは筆者]<sup>89)</sup>

神が人間と結んだ契約,あるいは人間に課した掟は, 神の創造物である大地を媒介にしているが, 直接的には人間の精神 (“his heart”) に対する神の期待の表白に他ならない。そしてアイクは, その契約あるいは掟の古代からの記録としての聖書の存在を主張し, 聖書に記載されてキリスト教社会に伝承された「心の真実」 (“the heart's truth”)<sup>90)</sup> をマッキヤスリン家の救済に対して標榜する。

‘There are some things He said in the Book, and some thing reported of Him that He did not say. And I know what you will say now: That if truth is one thing to me and another thing to you, how will we choose which is truth? You don't need to choose. *The heart already knows*. He didn't have His Book written to be read by what must elect and choose, but by the heat, not by the wise of the earth because maybe they don't need it or maybe the wise no longer have any yeart, but by the doomed and lowly of the earth who have nothing else to read with but the heart. *Because the men who wrote his Book for Him were writing about truth and there is only one truth and it covers all things that touch the heart.*’

[イタリックスは筆者]<sup>91)</sup>

「心が既に知っている」「唯一の真実」,つまり「心の真実」とは, アイクと伯父の対話を忠実に辿り総合すれば「人の心を動かすすべてのもの——名誉や誇りや憐みや正義や勇気や愛を包むものなのだ。」<sup>92)</sup> 最後の言葉は, 実は, 伯父マッキヤスリンの言葉で, 彼は, これを七年前, アイクがフェイスが作ったオールド・ベン殺害の絶好の機会を自ら放棄した時にアイクに語ったものである。「名誉」,「誇り」…は「心の真実」の内容であり, 取りも直さず, アイクが神との間に想起した掟, 契約の本質でもある。従って, アイクの体系的な思索には伯父マッキヤスリンの影響は否定できない。更に, 付言すれば, 「唯一の真実」, 「心の真実」, あるいは掟に対する復帰を伯父に倣って主張するアイクの背後には, 我々は, ノーベル賞受賞演説に於いて, 人間救済の方途として「愛」, 「名誉」, 「憐憫」, 「誇り」, 「正義」及び「勇気」を唱えた最もキリスト教的な作家フォークナーが透視できるはずである。

従って, この脈絡に於いては, 農園から荒野への移動が, 即ち南部の歴史を遡及し, 歴史以前の状態への時間的移行であるとアイクに意識された如く, 荒野の中に於いて, 今度は意識の

みならず全存在の変貌へと志向すべく、文明の穀（鉄砲、磁石、時計）を脱脚し、「謙譲」、「忍耐」、「勇氣」、「寛容」、「憐憫」と徐々に「心の真実」を修得して、掟の門の内側にいる自分を発見するアイクは、「自由」である。一方、我々がこのアイクの自意識の変貌の当然の帰結として予測していた農園財産の「放棄」という行為が、実は、変貌を遂げた自己存在の証左として既に吸収されていたことが明らかになる。神の掟は、南部白人がそれを私有の農園財産に作り改えた大地について次のように警告する。

...not to hold for himself and his descendants inviolable title for earth, generation after generation, to the oblongs and squares of the earth, but to hold the earth mutual and intact *in the communal anonymity of brotherhood*, and all the fee He asked was pity and humility and sufferance and [endurance and the sweat of his face for bread. (前出)〔イタリックスは筆者〕

「その大地を、同朋というだれの名前も特別についていない共同の状態で、損われない、お互いのものとして保っていくように」という掟の中では、たとえ祖先の土地であろうとも、「おいらは振りすてることなんてできやしないよ。振りすてることができるようなおいらの持物であったためしは一度もないんだからな。」<sup>100</sup>ということになる。つまり、土地を「振りすてる」権利は最初からアイクにはなく、アイクが神の掟の前に「自由」である以上、彼には、祖先達が主張して来た土地を「振りすてる」という行為は自己存在の一貫性を守ることに他ならない。

以上の解釈は、巨熊オールド・ベンの追跡をアイクの立脚点に立って歴史的なアレゴリーと見做して、農園財産の「放棄」を正当化するものである。この解釈の特徴は、既述の如く、飽くまで寓意的視点を貫くもので、巨熊追跡の物語が持つ神話（myth）と写実主義（realism）の二層構造のうち、深層の神話的要素を重視するものである。従って追跡者アイクが同様に持っている神話と写実主義の二層構造に於いて表層的な写実主義の要素が脱落してもそれを無視する。つまり、アイクは巨熊オールド・ベンを追跡して殺す猟師であり、同時に、荒野の、「人間の生の神話的原型」（“the old wild life”）の一つの「縮図であり神格」（“epiome and apotheosis”）であるオールド・ベンを跪拝しそれへの帰向する宗教的意識でもある。自意識の深化する過程に於いて、より強く神話の層に繋ぎ留められているアイクは、猟師であることを放擲してオールド・ベンを殺さない。

これに対して、写実主義的解釈の立場からは、猟師であるアイクが熊を殺さなかったという事実は、人格的撞着であり、逃避の行為でもある。たとえば、H・A・パラックによれば、「オールド・ベン殺害に於けるアイクの失敗は、自己からの脱出であり、逃避である。」<sup>101</sup>として、伯父マッキヤスリンが同じ立場、見解を取るものと見做す。J・W・ハントもまた、H・A・パラックと大体同じ論法でアイクに対して激しく伯父の見解を対立させる。しかし、パラック

の根本的誤謬は、巨熊の追跡と殺戮の物語を南部的背景を無視して広範な意味での「人生」を寓意化したものであるという仮定に立っている点にある。従ってアイクが熊を殺さなかった時点で、既に農園財産の「放棄」は予見されており、その意味では、極めて南部的な問題の農園財産の「放棄」はアレゴリカルな手掛りを剥離せられて、単に「人生」の抽象問題に化してしまう。

Saving the fyce had meant a repudiation, like the present one in the commissary, of a necessary suffering, an escape, a freedom from grieving.<sup>68</sup>

従って、オールド・ベン<sup>69</sup>の殺戮を回避し、人生 (life) の悲哀に耐え難いアイクは、芸術 (art) への逃避者としての烙印を押される。<sup>70</sup> 確かに巨熊追跡の物語はキリスト教世界にあっては、広義の人生の寓意化でもあり得る。そして、サム・ファザーズの指導で熊を狩るアイクの物語をアダム以来の人間の生の本質部分である悪 (掟の世界からの自己疎外) への開眼、成長の秘儀形態と解釈する批評家は多い。しかしアイクがこの作品で自己の存在を主張するのは、人間の生に潜在する悪に対する認識能力を獲得した類型的な大人 (“then he was twenty-one”) としてではなく、南部の歴史的悪を一挙に超越した領域に於いて、神の掟の下での人間の根源的善、「自由」を唱えるそれ自身極めて宗教的な意識、及び一貫した生の形態としてである。成人後のアイクは、荒野と農園、「自由」と農園の「放棄」の間を自らの存在空間を求めて往復するのではなく、その意識に於いて荒野の住人であり、又「自由」である。彼の実存に於いては、自分を南部歴史の中から選<sup>71</sup>び出したカルヴィニズムの神とともにあるという意識がすべてである。従って土地の「放棄」の問題も、既に、彼の存在意識の中に含まれてしまうのである。

更に、H・A・パラック、J・W・ハント等の説には、大熊オールド・ベンの象徴性が神話の層において問題にされることがない。ハントにあっては、オールド・ベンは一応「処女なる荒野の朦朧とした精神」<sup>72</sup> という象徴性が付与されるが、主人公アイク及び狩猟そのものの写実主義に偏した分析からは、十分な象徴性は得られていない。狩猟隊の中で、文明の殻を棄てて全存在を荒野と一体化せしめるアイクだけに熊はその全貌を現わすように、大熊オールド・ベンの象徴性とはアイクにとっての象徴性であり、大熊を追跡するアイクの精神と行動の重層的構造が把握されてはじめて明らかになる。果して熊は何を象徴するのであろうか。従来の機械的な象徴主義では、紛う方なく、熊は荒野の象徴であり、「荒野の力と運命の本質であり結晶である」<sup>73</sup> しかし、この象徴主義に於いては、荒野はアイクによって寓意的な生の「場所」として新たに表象し直された荒野ではなく、荒野はあくまで荒野として問題にされているにすぎない。さて南部農園文明の彼方に拡がる荒野とは、アイクの寓意的解釈に於いて、南部の過去の歴史の彼方に拡がる神話の領域であった。つまり、人間の生の原型が営まれる神の掟の門の内側である。そしてその領域で時間を超越して存在し続ける大熊オールド・ベン

は、「まるで生きている人間のように一つの名前、一つの明確な呼称を独力でかち取っていた」<sup>64</sup> 人格であり同時に「一つの神格」でもある。従ってR・P・アダムズによれば、「オールド・ベンは、『白鯨』に於ける鯨のように生の普遍的原理を象徴している。」<sup>65</sup> 更に、C・ブルックスには明らかに「オールド・ベンは人間がそれに対して自分の精神的偉大さを証明すべき荒野そのもの、あるいは、自然を象徴する。」<sup>66</sup> かくオールド・ベンは、アイクの視点から、寓意性によって表象し直されたものとしての荒野の象徴たりえる。象徴主義が問題になる時、象徴の対象となる被象徴物と象徴の間には、何ら本質的關係は存在しない。従って、例えばオールド・ベンに襲いかかる獵犬ライオンは、「文明の冷酷で非人格的な殺戮機械」<sup>67</sup> であると言える。又、荒野、つまり、人間の原型的な生の場と巨熊の間には、類似關係は見出されない。だから、熊は荒野の象徴であると言うことはできる。そして、永年に亘る熊の追跡と最後の死は、人間の「自由」の喪失を代償にした神の殺戮の儀式、劇であり、既に劇の前半でその役柄を果たしたアイクにとっての悲劇は、その歴史的事件の目撃者たらざるを得ないという点にある。

しかし、本論を総合する意味で、あくまで主人公アイクの視角から、巨熊の意味するものを再検討してみなければならない。アイクのみならず狩猟隊の人々には、巨熊は荒野の中であたかも人格化されて生きつづける。その巨熊は、アイクが荒野と完全に一体化した時に、荒野はその空間的拡がりを無化して、自分の内在的姿を露わにする。

he ... emerging suddenly into a little glade and the wilderness coalesced. It rushed, soundless, and solidified—the trees, the bush, the compass and the watch glinting where a ray of sunlight touched them. *Then he saw the bear. It did not emerge, appear: it was just there, immobile, fixed in the green and windless noon's hot dappling, not as big as he had dreamed it but as big as he had expected, bigger, dimensionless against the dappled obscurity, looking at him.*

[イタリックスは筆者]<sup>68</sup>

南部の現実を棄てて、ひたすら宗教的実在を求める「見習道士」(“novitiate”)として掟の門を叩く者のみに荒野に於ける熊の内在性が見える。「出てきたのでも、あらわれたのでもなかった——ただそこにいたのだ。」

さらに掟の門への案内人サム・ファザーズがアイクの為に用意した視角からは、巨熊は一匹の熊ではなく、人間の知力を遥かに越えた能力を具現する人格、さらには神格として解釈される。ピークォド号の檣頭からエイハブの部下達が白鯨を探索するように、アイクは熊の通過地点にある「見張り場」(“stand”)に立つが、その段階での彼には熊は見ることができない。

‘I didn’t see him,’ he said. ‘I didn’t, Sam.’

‘I know it,’ Sam said. ‘*He done the looking*. You didn’t hear him neither, did you?’

‘No,’ the boy said. ‘I——’

‘*He’s smart,*’ Sam said. ‘*Too smart.*’ [イタリックスは筆者]<sup>(49)</sup>

見張っているはずのアイクは、逆にオールド・ベンから「見習い道士」として「観察され」、アイクにとってオールド・ベンは、「アイクの知力を遥かに越えている。」既に述べた様に狩猟の仮装をした信仰への復帰の寓意物語を成立させている根本モチーフは、南部の歴史を支配するカルヴィンの神意に対するアイク独自の鋭敏な意識であった。南部の呪咀された歴史の中でアイクが意識する神の「怒りに満ちた」(“*exasperated*”) 眼差しは、狩猟のアレゴリーに於いては、対逆的に神の掟の本質に対して向けられた眼差しと回帰への願望として表出される。従って、南部・旧約の歴史とそれに対する寓意的事件との間の機械的連関からすれば、巨熊オールド・ベンは、創造の時から歴史の奥に位置する南部カルヴィニズムの神の寓意的象徴である。しかし、巨熊は、掟の領域の支配者、絶対者の姿態化ではなく、その特質は歴史的内在性と人格性である。ゆえに、巨熊オールド・ベンは神の内在性及び人格化の象徴であるといえる。その象徴主義には、C・ブルックスの言う、正統的キリスト教から逸脱した「汎神論」<sup>(49)</sup>の影が濃厚であり、又、H・H・ワゴナーは、アイクの思念する神を「正統的キリスト教の内在的であると同時に超越的な神ではなく純粋に内在的な神である。」<sup>(49)</sup>とする。

さて、アイクの農園財産の「放棄」は、対話者の伯父マッキャスリンからすれば、「それは逃避だ。」<sup>(49)</sup>ということになる。すなわち、農園に呪縛された黒人達の存在が解放されて自由になるまでは、アイクが南部旧家の一員としての自己に設定した問題が解決されたことにはならない。従って、「彼(アイク)は固有の美德を修得し悪に遭遇した時はそれを認知できるが、その認知から生起する責任に対して真に対処することが出来ない。」<sup>(49)</sup>というJ・ゴールドによるアイクの人物粗描が成されうる。黒人存在は、南部白人の文明を正当化しない神の歴史からは、アイクがそれへと回帰への必死の努力を成す以前から既に「自由」であった。今度は白人が歴史的責任に於いて、現実の生活の内部で、その「自由」を証明してやる問題が残されているわけである。アイクは、その責任を人種的強さに対する楽観性へと置きかえることによって確かに「逃避」する。しかし、元来アイクのカルヴィン主義的選民意識及び自己救済性と南部の現実問題の間には、作品が所有する神話と写実主義と同質量の開きがある。そして、アイクに於ける現実的逃避の責任は、作品の虚構の中にあると言ってよい。つまり、狩猟の写実主義から神話の世界へ、「呪い」の認知から「自由」の認識へという飛躍の方向性は作品解釈上、不可避免的に露わになる。作家フォークナーの一分身であるといえる伯父マッキャスリンは、自分達大人が無意識に行ってきた狩猟がアイクに対して図らずも示した意味を遂に悟る。

「思うに(いや、おれは認めるが)、おえは、おまえの時代からただ一人神さまに選ば

れたのだろうさ、ちょうど、バックとバディが彼らの時代から選ばれたとおまえが言うようにな。そして、そのために神さまは、一頭の熊と一人の老人と四年間という年月を、ただおまえのためにお使いになったんだ。そしておまえがそこまで達するのに十四年間かかり、オールド・ベンは同じ年月、いやおそらくそれ以上かかり、サム・ファザーズには七十年以上かかったのだ。」<sup>(6)</sup>

尚、J・ゴールドは、第四章の中枢を成すアイクと伯父 マッキヤスリンの対話が、「(作家) フォークナーの自分自身との対話」<sup>(6)</sup> であるという断定を後期の作品に 顕著になった 物語のダイダクティックな様相に於いて下している。この言葉が意味するところは、第四章の対話がフォークナーとアイク、あるいはフォークナーと 伯父 マッキヤスリンという関係で成されたこと、つまり、作家フォークナーの位置は、アイクと伯父マッキヤスリンの間を微妙に揺れ動いているということである。しかし、フォークナーが一貫して描いているのは、南北戦争後に旧農園主の後裔として生きたアイクの意識と行為の側である。従ってアイクの意識構造の外側から、黒人の問題を扱うのは作品の枠を越える。あるいは、多くの 批評家が行うように、*Go Down, Moses* 全体から、あるいは、特に“Delta Autumn” から成されねばならない。アイクの人物規定にもそれは言えることで、現実的な黒人種の問題を終末に於ける理想の国の出現へと流れる神の歴史の動力に楽観的に放任してしまうアイクは、R・W・B・ルイスの言う「アメリカのアダム」の精神的血縁ではある。

(註)

- (1) William Faulkner, “The Bear” (Random House, 1942), p. 309. なお、翻訳は富山房版、フォークナー全集の大橋健三郎氏訳を参照。
- (2) Hyatt H. Waggoner, *William Faulkner: From Jefferson to the World* (Univ. of Kentucky Press, 1966), p. 206.
- (3) William Faulkner, *op. cit.*, p. 195.
- (4) C. Brooks, *William Faulkner: The Yoknapatawpha Country* (Yale Univ. Press, 1969), p. 37.
- (5) William Faulkner, *op. cit.*, p. 193.
- (6) *Ibid.*, p. 283.
- (7) *Ibid.*, p. 258..
- (8) *Ibid.*, p. 259.
- (9) *Ibid.*, p. 258.
- (10) *Loc. cit.*
- (11) *Loc. cit.*
- (12) *Ibid.*, p. 191.
- (13) *Ibid.*, p. 295.
- (14) *Ibid.*, pp. 192—193.
- (15) *Ibid.*, p. 193.



- (16) *Ibid.*, p. 191.
- (17) *Ibid.*, p. 257.
- (18) *Ibid.*, p. 295.
- (19) *Ibid.*, pp. 197—198.
- (20) *Ibid.*, pp. 258—259.
- (21) *Ibid.*, p. 282.
- (22) *Ibid.*, pp. 285—286.
- (23) *Ibid.*, p. 289.
- (24) *Loc. cit.*
- (25) *Ibid.*, p. 236.
- (26) *Ibid.*, p. 209.
- (27) *Ibid.*, p. 299.
- (28) *Ibid.*, p. 300.
- (29) *Ibid.*, p. 254.
- (30) John W. Hunt, *William Faulkner: Art in Theological Tension* (Syracuse Univ. Press), p. 141.
- (31) William Faulkner, *op. cit.*, p. 260.
- (32) *Loc. cit.*
- (33) *Ibid.*, p. 297.
- (34) *Ibid.*, p. 256.
- (35) Herbert A. Perluck, ““The Bear”: An Unromantic Reading” in *Religious Perspectives in Faulkner’s Fiction* (ed. by J. Robert Barch, S. J.) (Univ. of Notre Dame Press, 1972), p. 178.
- (36) *Ibid.*, p. 180.
- (37) H. A. Perluck は特に J. Keats の詩の件に言及している。 *Idid.*, pp. 185—188.
- (38) John W. Hunt, *op. cit.*, p. 141.
- (39) Joseph Gold, *William Faulkner: A Study in Humanism From Metaphor to Discourse* (Univ. of Oklahoma Press, 1967), p. 53.
- (40) William Faulkner, *op. cit.*, p. 193.
- (41) Richard P. Adams, *Faulkner: Myth and Motion* (Princeton Univ. Press 1968), p. 146.
- (42) C. Brooks, *op. cit.*, pp. 269—270.
- (43) John W. Hunt, *op. cit.*, p. 144.
- (44) William Faulkner, *op. cit.*, p. 209.
- (45) *Ibid.*, p. 203.
- (46) C. Brooks, *op. cit.*, p. 41.
- (47) Hyatt H. Waggoner, *op. cit.*, p. 207.
- (48) William Faulkner, *op. cit.*, p. 283.
- (49) J. Gold, *op. cit.*, p. 67.
- (50) William Faulkner, *op. cit.*, p. 299.
- (51) J. Gold, *op. cit.*, p. 74.

(昭和49年 9 月28日受理)